

Calligraphic Anarchist

【登場人物】

高城有紀（17） 高校二年生

飯野美香（18） 高校三年生

森下香苗（18） 高校三年生

遠藤佐知子（16） 高校一年生

君島薫（16） 高校一年生

笹野晴信（34） 高校教員・書道部顧問

鷺崎絵里（51） 高校校長

橘静香（17） 高校二年生

仁科（17） 高校二年生

長部（17） 高校二年生

狩野結衣（17） 高校二年生

飯野好美（44） パートタイマー・飯野の母

木場誠（45） 無職・飯野の元父

君島節子（38） 君島の母

笹野直美（31） 専業主婦・笹野の妻

笹野美里（4） 幼稚園生・笹野の娘

坂下浩太（29） 雑誌編集者

大山仲道（55） 莊願寺住職

○イベント会場・入口（回想）

人で賑わう大型イベント会場。

出入り口には「全国書道パフォーマンス大会」と書かれた看板。

○同・ホール（回想）

イベントホールの中央に、縦4m、横6mの紙が敷かれている。

その紙を囲むように円形に組まれた客席に、150人ほどの観客がひしめいている。

紙の前に、袴姿の女子高生が12人並ぶ。

その中央にいる森下香苗（18）が、選手宣誓のように手を上げる。

森下「日下女子高校です。よろしくお願いします  
ます」

一同「お願いしまーす！」

一同が頭を下げると、観客からの拍手。

ホールのスピーカーから、Greenの

『刹那』が流れてくる。

森下が巨大な筆と赤い墨の入ったバケツを持って、紙の中央へ歩いてくる。深呼吸する森下。

森下「はい！」

赤墨をふくんだ筆が、勢いよく紙に叩きつけられる。

(回想終わり)

○日下女子高校・書道室(夕方)

校舎の2階の端に位置する、40畳ほどもある和風の書道室。

床の間に掛け軸や花などが飾られており、料亭の大広間のような装い。

壁には、書道部員の作品が綺麗に表具されて、何作か掛けられている。

3人がけ用の横長のテーブルが15台並べられ、座布団も敷かれている。

テーブルの上には、さつきまで書道をしていたと思われる道具や半紙が広がっている。

その中で、ジャージ姿の女子高生が3

6人、休憩ムードで高級そうな缶入りクッキーをつまんでいる。

○イベント会場・ホール（回想）

森下が紙の中央に大きく書いたのは、

「刹那」という字。

森下が後ろに下がり、3人の女子が大筆とバケツを持って前に出る。

その中に、君島薫（16）がいる。

君島たち「はい！」

君島たちが同時に筆を走らせる。

1人1行で、3行の字が書かれていく。

1文字1文字丁寧なタッチで書く君島。

（回想終わり）

○日下女子高校・書道室（夕方）

女子高生たちがクッキーを食べている

と、部屋の外から叫び声が聞こえる。

○イベント会場・ホール（回想）

新たに4人、同時に字を書いていく。

その中に遠藤佐知子（16）がいる。  
躍動的な書き筋、そして字。

しなやかな動きとは裏腹に豪快な書。

（回想終わり）

○日下女子高校・廊下（夕方）

女子高生たちが廊下に出て辺りを見回すと、書道室の隣にある書道準備室のドアが開いている。

○イベント会場・ホール（回想）

遠藤たちが後ろに下がると、次に出てきたのは飯野美香（18）。

飯野「はい！」

緑の墨を使い、刀で人を斬るように、大きく「Green」と筆を走らせる。

（回想終わり）

○日下女子高校・廊下（夕方）

女子高生たちが恐る恐る書道準備室を覗きこむと、絶句してしまう。

○イベント会場・ホール（回想）

新たに女子が3人出てきて、学校名を書いたり落款型のシールを貼る。

全員で紙の周りを囲い、紙の端を持つ。

森下「せーのっ！」

全員「はい！」

全員で、紙が観客に見えるように立てかける。

『刹那』の歌詞が書かれた作品。

アナウンス「日下女子高等学校の皆さんの作品です。審査をお願いします」

曲が終わり、観客から拍手が起こる。

その様子を、補欠部員席から高城有紀

（17）が見ている。

尊敬の眼差しの高城。

（回想終わり）

○日下女子高校・書道準備室（夕方）

廊下から覗く女子高生たちが絶句している。

書道準備室に飾られていた、書道大会の賞状や盾やトロフィーの数々が、全て無残に破壊されている。その中で、目を丸くして呆然とたたずむ、先程の叫び声の主、高城。

○タイトル『Calligraphic Anarchist』

○国道（夕方）

港区のビル街を通る第一京浜国道。グレーのジャージ姿の女子高生36人が、ランニングをしている。先頭は森下。

森下「ファイト！ ファイト！」

列の中には、高城、遠藤、君島がいる。彼女たちのジャージの背中には、「日下女子高校書道部」とプリントされている。

○莊願寺・境内（夕方）

港区に佇む莊願寺。

その境内は広大で、多くの参拝客がいるが、まだ充分スペースがある。

その境内の隅で、書道部員たちが森下の掛け声で腹筋をしている。

森下「36……37……」

○日下女子高校・書道室（夕方）

私語もせずに書道室で書を書く、ジャ—ジ姿の部員たち。

一年生たちが半紙に「永」の字を書いている。

二年生たちは「九成宮醜泉銘」の臨書（手本の模写）、三年生たちは半切（書初め用の大きさの紙）に自由書きをしている。

部員たちを、森下が見て回っている。二年の列を見ると、高城の背筋が曲がっている。

森下「ほら、背筋伸ばさないと。筋トレして  
る意味ないよ」

高城「はいっ」

森下「あと〃ハネ〃が甘いよ。ハネさすんじやなくて、筆をスツとずらすだけ」

高城「あ、はい、すいません！」

森下「大丈夫、忘れないようにね」

森下が高城の肩をポンと叩き、その場から離れる。

仁科「前も言われたでしょ（小声）」

高城の後ろに座っている仁科（17）が呟く。

その言葉に苦笑いする高城。

高城の隣に座る橘静香（17）が、キツと仁科を睨む。

橘「ちよ（つと）……」

仁科がイヤミったらしく人差し指を立て、「シー」というジェスチャーをする。

森下はその一連に気づいていない。

○同・屋上（夕方）

制服姿の飯野が、屋上で一心不乱に書いている。

書いているのは「九成宮醴泉銘」「雁塔がんととう

聖教序（せいこうじゆ）」「蜀素帖（しよくそてふ）」などの抜粋で、その字は荒々しく暴れているかのよう。辺りには書いた半紙が散らばっている。書いている途中でくしゃみをし、線が曲がってしまふ。

飯野「あ……」

○同・書道室（夕方）

書道室の窓から、屋上の飯野の姿を見ている森下。

フフツと優しく微笑む。

森下が掛け時計を見ると、5時5分前。

森下「はい、書いたまま聞いて。私今から文

化祭実行委員に行ってきます」

一同「はい！」

森下「あ、ちなみに言っておくと、日下祭で

はウチは展示とパフォーマンスをやります。

メンバーはまた今度発表ね」

一同「はい！」

森下「じゃあ今から10分休憩で」

一同「はい！」

休憩モードに入る部員たち。

森下「あ、今日のお菓子は校長の差し入れだ  
って」

キャピキャピと騒ぐ部員たち。

遠藤が部屋の隅にある棚を開け、「御菓子入」と書かれた箱を取り出す。

箱を開けると、どら焼きの入った包みが入っている。

遠藤「あ、すごおい！ 近江屋のどら焼きい！」  
包みを開け、どら焼きに群がる部員たち。

森下が満足げに部屋を出る。

一同がどら焼きを食べている中、君島が一人黙々と書を練習している。

高城が君島のところへ来る。

高城「また薫ちゃんは休憩しない？」

君島にどら焼きを差し出す高城。

高城「ちゃんと休まなきゃ死んじゃうよ？」

君島「あ、（受け取り）ありがとうございます  
……」

○同・外観（夕方）

港区のビル街から少し離れた場所に佇む、日下女子高校の校舎。

校舎の少し向こうには、歩いて数分の所にある莊願寺の本堂が見える。

空は赤から青へとグラデーションを描き、本堂のシルエットが浮かび上がる。

部員たちの声「ありがとうございますー！」

○同・書道室（夕方）

ジャージから制服に着替える部員たち。

着替えた者から書道室を出ていく。

君島が出る時、壁に掛かっている神棚に一礼していく。

○同・下駄箱（夕方）

制服に着替えた部員たちが、靴を履き替えている。

仲よさげに話す高城と橘。

橘 「マツク寄ってこー」

高城 「行くー！ お腹減ったー！」

わざわざ高城の背中にぶつかっていく

仁科と長部（17）。

仁科「あんだけどら焼き食ってまだ食うとか」

長部「そのエネルギー、書道に回せよって話だよな」

バカ笑いして行ってしまう仁科、長部。

橘 「ちよ、アンタら……!!」

橘を引きとめる高城。

高城 「いいよ、大丈夫だよ！」

橘 「仁科、サイっアク！ アイツ練習中も

有紀悪く言ってさー！」

高城 「私、大丈夫だよ全然。実際上手くな  
ないもんねー、もう二年目なのにねー、な  
んでだろー、アハハハ」

橘 「私は有紀の字、好きだよ？」

高城 「ありがとね、いつも」

橘 「ホントだよ？」

高城 「……フフフ、大好き！」

高城が橘に抱きつく。

○同・書道準備室（夜）

森下が書道準備室のドアを開け、電気をつける。

教室の半分ほどの広さの準備室。

壁際の棚には、書道大会の賞状、盾、トロフィー、旗がいくつも並べられている。

受賞時の記念写真も何点か飾られおり、「刹那」で受賞した写真もある。

他に、書道道具の入ったラックが何台か置かれている。

異常がないことを確認する森下。

森下「よし」

電気を消し、ドアを閉め、鍵をかける。

○ビル街（夜）

遠藤と一年生たちが帰路についている。

遠藤と別れ、地下鉄の駅に入って行く一年たち。

一年たち「お疲れ〜」

遠藤「お疲れ様あ〜」

携帯を取り出し、電話をかける遠藤。

遠藤「あ、コウくん？ 今部活終わったよお。  
うん、会いたいなあ。うん、いつものところ  
ね？ うん、わかったあゝ」

○日下女子高校・職員室（夜）

教員もまばらな職員室。

ドアが開き、森下が入ってくる。

奥の席にボーっと座っている笹野晴信

（29）を見つける。

森下「笹野先生」

笹野「え……？」

森下「鍵、返却に来ました」

笹野「あ、ああ……」

森下が笹野の席まで行き、書道室と書  
道準備室の鍵を手渡す。

森下「たまには顔出して下さいよ。日下祭も  
うすぐなんですけど」

笹野「いやあ、お前がいるから大丈夫だろ」

森下「いえ、そういう問題じゃ……」

笹野「ちよつと最近忙しいからな、悪い。あ、  
電話かけなきゃ」

笹野が携帯片手に、職員室内の喫煙ルームに入っていく。

森下「……」

○同・廊下（夜）

職員室から出てくる森下。

出てきたところで、下駄箱へと歩く飯野と出くわす。

森下「お疲れ様」

飯野「お疲れ」

森下「調子良くなかった？」

飯野「どうして？」

森下「書いたの持ってないから」

飯野「……」

並んで歩く二人。

森下「捨てるのはもったいないと思うな」

飯野「残ってても意味ないからさ」

森下「美香もたまには部活出てほしいな」

飯野「副部長だから？」

森下「私が見たいから」

フフツと笑う森下。

森下 「最後の日下祭なんだから、ね？」

○ファーストフード店・店内（夜）

テーブルに向かい合わせてハンバーガーを食べている高城と橘。

高城 「私、このままだと展示もはじかれちゃうかな」

橘 「展示って日下祭？」

高城 「うん」

橘 「頑張んなよ！ できるってやれば！」

高城 「なーんで上手くならないんだろ？」

橘 「じゃあさ、目標立てなよ。何か賞獲る、みたいな」

高城 「そうだ、しーちゃんが賞獲った時、すごい喜んでたよね。泣いてたもんね」

橘 「えー？ あー、うん、でも、嬉しかったな、確かに。頑張ったし」

高城 「いいなー」

橘 「だから頑張んなって！」

高城 「そっち（のバーガー）ちよつと頂戴」

橘 「聞いている？」

○ラブホテル・洗面台（夜）

清潔感のある広々とした洗面台。

バスローブ姿の遠藤が、洗面台でメイクをしている。

遠藤「（寝室に向かって）仕事大変なのお？」

○同・寝室（夜）

シンプルかつ高級感のある寝室。

ベッドの傍で、彼氏の坂下浩太（26）がワイシャツを着ている。

坂下「まあな。でもあと校了だけだし」

遠藤が洗面台から出てくる。

遠藤「頑張ってたねえ」

坂下「お前こそ、部活大変なんじゃねえの？」

遠藤「うん、結構お……」

遠藤が制服に着替え始める。

坂下「スゲーよな筋トレとか、運動部でもねーのに。今は毎日なんだろう？」

遠藤「うん、文化祭あるからあ」

坂下「ああ、悪い、行けそうにないわ」

遠藤 「……ううん、大丈夫う」

坂下 「怪我とかすんなよ？」

遠藤 「ありがとう」

キスをする二人。

○電車・車内（夜）

ラッシュユのピークを過ぎた車内。

森下と飯野が話している。

森下 「来年、どうするの？」

飯野 「……どうしょ？」

森下 「私は多分進学」

飯野 「どこ？」

森下 「才桜大学」

飯野 「部活なんてやってていいの？」

森下 「推薦で行けそうだから。やってた方が

いいの」

飯野 「で、将来は書道家？」

森下 「それは美香も一緒でしょ？」

飯野 「……」

森下 「美香、進学しないの？」

○駅・ホーム（夜）

人の少ないホームに、飯野が降りる。  
森下を乗せた電車が発車する。  
離れていく森下に手を振る飯野。

○飯野家・外観（夜）

古い公営団地。  
玄関のドアを開け、入っていく飯野。

○同・居間（夜）

狭い上に物が多い部屋。  
部屋の中央のテーブルの上に、映画の  
レンタルDVDが積み重なっている。  
その中の一本をテレビで観ている飯野。  
濃厚な人間ドラマの映画。  
玄関の方からドアが開く音が聞こえ、  
母親の好美（44）がスーパーの袋を  
提げて居間に入ってくる。

好美 「ただいまー」

飯野は映画に見入っていて無反応。

好美 「また映画？ たまにはデイズニーとか

借りてきてよ」

無反応の飯野。

やれやれというため息をつく好美。

好美「今ご飯作るね」

台所に消えていく好美。

好美「(台所から) 洗い物やっといってくれた

の? ありがとねー」

飯野「……」

×

×

×

×

テーブルにご飯、野菜炒め、味噌汁が  
並べられる。

コップに水を入れて持ってくる好美。

好美「さあ、食べよ食べよ」

飯野、映画を気にしつつも、体をテー

ブルに向ける。

好美「いただきますーす」

飯野「いただきます……」

玄関のチャイムが鳴る。

好美「もう、誰え?」

好美が立ち上がり、玄関に向かう。

好美「ひっ……!!」

飯野が玄関を見ると、ドアの外に父親の誠（45）が立っている。

ヨレヨレの服をだらしなく着ている誠。

誠 「よお……」

（O・L）

○日下女子高校・校庭

体育の授業で、バレーボールをやっている2年A組。

高城は橘と同じチーム。

相手チームの前衛には仁科、長部がいる。

仁科、高城に向けてアタック。

受け取れずに転ぶ高城。

橘 「有紀！」

駆け寄る橘。

高城 「あ、大丈夫大丈夫」

高城を見てヘラヘラ笑っている仁科、長部。

仁科たちと同じチームで、後衛にいる狩野結衣（17）が呆れている。

狩野 「頭わる……（小声）」

仁科 「は？ 何か言った？」

狩野 「別に……」

○同・屋上

屋上で書を書いている飯野が、校庭の一連の流れを見下ろしている。

飯野が筆を走らせ「愛多憎生」と書く。

○同・外観（夕方）

放課後を知らせるチャイムが響く。

○同・廊下（夕方）

君島が廊下を急ぎ走る。

元陸上部仕込みのフォーム。

○同・職員室（夕方）

静まっている職員室。

ドアが開き、君島が飛び込んで来る。

君島 「笹野先生！」

驚く教員一同。

慌てて駆け寄る笹野。

笹野 「バカ、あんま大声出すな！」

君島 「あ、すみません」

笹野が書道室と書道準備室の鍵を渡す。

笹野 「ほら」

君島 「ありがとうございます」

鷺崎 「待って！」

君島が見ると、かしこまっている教員

たちの前に、校長の鷺崎絵里（51）

が立っている。

君島の方へ歩いてくる鷺崎。

鷺崎 「あなた、書道部でしょ？ 名前は？」

君島 「あ、1年A組の君島です」

鷺崎 「君島さんね。あなた、この前の書道パ

フォーメンズ大会に出てたわよね？」

君島 「あ、はい！」

鷺崎 「頑張ってるのね。日下祭も楽しみにし

てるわ」

君島 「はい、ありがとうございます、失礼し

ます！」

君島が職員室を出ていく。

鷺崎 「いい1年ですね」

笹野 「そ、そうですね……」

○同・2年A組（夕方）

帰宅する生徒がいる中、教室で書道部  
ジャージに着替えている高城、橘。

橘 「よし、行こ！」

高城 「うん！」

○同・屋上（夕方）

屋上に吹く風に身を任せる飯野。

辺りには書が散らばっている。

校庭からのかましい声に気づく飯野。

見降ろすと、ジャージ姿の部員たちが

校門に集まっている。

飯野 「……」

○同・書道室（夕方）

書道室の扉が開き、君島が入ってくる。

壁に掛かっている神棚に慌ただしく一

礼をし、また廊下に出る。

○同・廊下（夕方）

書道準備室のドアの前に立ち、一礼する君島だが、勢い余ってドアに頭をぶつける。

頭を押さえながら鍵を差し入れる君島。

○同・書道準備室（夕方）

君島が入ってきて、書道道具の入ったラックに向かう。

紙専用ラックから半紙の束（500枚）を二束重ねて持ち出す。

○同・書道室（夕方）

君島が、書道室の教壇に半紙の束をドカッと置く。

一仕事終えたというため息をつき、すぐさま書道室を出る。

○同・校門（夕方）

書道部ジャージを着た生徒たちが集ま

って雑談をしている。

高城と橘が手を取り合って温めている。

高城 「最近急に寒いく！」

橘 「(有紀の手) 冷た！」

高城 「手が冷たい人って心があつたか……」

橘 「くないから」

高城 「えー？」

橘 「ウソウソ」

二人を白い目で見ている仁科、長部。

そこへ、森下が部員名簿を持って走ってくる。

森下 「ごめーん、お待たせ！」

私語をやめる部員たち。

森下 「今日もお願いしまーす (頭を下げる)」

一同 「お願しまーす！ (頭を下げる)」

森下 「欠席者とかいますか？」

遠藤がおずおずと手を上げる。

遠藤 「あ、欠席じゃないんですけどお、ちよ

っと生理でえ……」

森下 「筋トレ厳しい？」

遠藤 「はい、すみませえん……」

森下「いいよ。じゃあ、書道室してもらって  
もいい？ 私たち戻ってくるまで」

遠藤「はい。失礼しますう」

しずしずと校舎へと去る遠藤。

森下「じゃ、あと（の人は）は筋トレね」

一同「はい！」

ジャージに着替えた君島が走ってくる。

君島「部長、これ」

森下に書道室の鍵を渡す。

森下「ありがとう」

そこに、ジャージに着替えた飯野が現  
れる。

部員1「副部长だ……（小声）」

部員2「珍しー……（小声）」

飯野「私もいい？」

驚く森下だが、次第に笑顔になる。

飯野の肩をポンと叩く森下。

森下「（ついてくるの）ゆっくりでいいからね」

飯野「ありがとう」

森下が部員たちの方を向く。

森下「じゃあ、行くよ！」

一同「はい！」

○国道（夕方）

36人の部員が、森下を先頭に、国道をランニングしている。

森下「ファイト！ ファイト！」

列の最後尾に飯野。

○同・一階トイレ・個室（夕方）

遠藤が入っているトイレ。

携帯を見ながら慣れた手つきでタバコ

をくわえ、火をつける遠藤。

気だるそうに煙を吹かす。

顔をしかめ、腹を押さえる。

遠藤「いててて……」

○荘願寺・境内（夕方）

境内の隅で腹筋をする部員たち。

森下「48……49……」

そこへ、住職の大山忠道（55）が歩いてくる。

大山を見て立ち上がる森下。

森下「先生、こんにちは」

他の部員も挨拶に立ちあがろうとする。

大山「いやいや、そのまま」

森下「(部員たちに) 続けてて」

大山「練習ご苦労様」

森下「いつも(境内を)使わせて頂いて、ありがとうございます」

大山「いやいや。校長先生はお元気かな？」

森下「はい」

大山「宜しくお伝え下さいね。もうすぐ文化

祭かな？」

森下「はい、是非いらして下さい」

大山「ええ、楽しみにしてますよ」

森下「はい、頑張ります！」

大山「じゃあ」

森下「ありがとうございます」

去る大山に、頭を下げる森下。

飯野「香苗、(腹筋)終わったよ」

森下「うん、じゃあ次、背筋」

○日下女子高校・外観（夕方）

校庭に、運動部の声が響いている。

○同・書道室（夕方）

森下たちが書道室の扉を開けると、遠藤が座っている。

直されたメイクが目立つ遠藤。

遠藤 「あ、お帰りなさい」

森下 「……どう、体調？」

遠藤 「はい、大丈夫ですう」

森下 「そう？ 良かった……」

×

×

×

×

書を書き始める部員たち。

飯野も半切に自由書きをしている。

部員たちを見て回る森下。

森下が掛け時計を見ると、4時半。

森下 「ちよつと早いけど、文化祭実行委員行  
ってきます」

一同 「はい！」

森下 「今日書いたものは後で講評して、良い  
のは日下祭で展示するから」

一同「はい！」

森下「じゃあ、あとは副部長の指示で。（飯野に）お願いね」

飯野「うん」

部屋を出ていく森下。

飯野「じゃあ……10分休憩で」

○同・職員室（夕方）

鷺崎が教員全員に、日下祭への心構えを説いている。

鷺崎「では、日下祭に向けて、皆さん頑張ってください。楽しみにしていますよ」

一同「はい」

教員たちが自分の席へと散開する。

鷺崎「笹野先生」

笹野「は、はい！」

鷺崎「先生は特にお願ひしますよ。『神野大会』の準備も今の内に進めておいて下さい」

笹野「あ、はい」

鷺崎「大山先生とは連絡を取りましたか？」

笹野「大山……？」

鷺崎 「大山忠道先生、住職の」

笹野 「あ、いや、これから……」

鷺崎 「お願いしますね。今年は特に森下さんが最後ですからね。1年にも良い子がいますし。くれぐれも滞りなくお願いします」

笹野 「はい……」

鷺崎 「では」

鷺崎が部屋を出ようとして振り返る。

鷺崎 「それと、部室にお菓子を差し入れておいたので、よろしければ先生もどうぞ」

笹野 「あ、ありがとうございます……」

鷺崎が職員室を出ていく。

緊張の糸が解ける教員たち。

○同・書道室（夕方）

飯野が棚を開けると、「御菓子入」に饅頭の包みが入っている。

それを見てかしましく騒ぐ部員たち。

飯野、包みを棚に戻す。

キョトンとする部員たち。

飯野 「ちよっと待ってて」

飯野が自分のスクールバッグから、缶入りのクッキーを取り出す。

飯野「これ、貰い物なんだけどさ、こっち食べない？」

遠藤が缶を見て顔をほころばせる。

遠藤「うわあ、『ルディエール』のクッキイー！」

飯野「有名なの？」

遠藤「超美味しいんですよ！」

キヤツキヤと騒ぎ出す部員たち。

その中で、君島がおずおず手を挙げる。

君島「あの、いいんですか、クッキー……」

飯野「だって和菓子ばっかってどうなのって

感じじゃない？ どんだけ和三盆好きなの

みたいな。香苗もないし、今のうちだよ。

えーと……」

君島「君島です」

飯野「あ、そうそう、君島はいらない？」

君島「……」

高城が目を輝かせて君島に飛びつく。

高城「せっかくだから食べよーよ？」

遠藤「そうだよお、超美味しいんだってえ」

君島「……そうですね」

ワーツとクツキーに群がる部員たち。

各々「美味しい」と小躍りしながらムシヤムシヤ食べる。

高城「さっちゃんって高そうなお菓子とか詳しいよね。よく食べるの？」

遠藤「そんなじゃないですけどお、たまにいい」

高城「さっちゃんの褒めるお菓子全部美味しいもんね」

口いっばいに頬張る高城を見て、呆れる橘。

橘「ちよ、有紀食べすぎ！」

高城「えー、だって美味しい」

橘「残しといてよちよつとは！ あ、半紙無くなりそうだから取ってきてよ」

高城「えー？」

橘「早くくくすする」

高城「はーあーいー」  
シュンとして部屋を出る高城。

○同・廊下（夕方）

高城が書道準備室の前に立ち、ドアを開ける。

中を見た途端、真っ青になる。

○同・書道室（夕方）

高城の叫び声が聞こえてくる。

部員たちのクッキーを食べる手が止まる。

○同・外観（夜）

陽が沈み、校舎が闇に溶けていく。